
灰かに甘い

筐咲 月彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仄かに甘い

【Nコード】

N6385Z

【作者名】

筐咲 月彦

【あらすじ】

創業75年の老舗和菓子屋“八軒堂”。もうひとつ流行っていない老舗が打ち出した起死回生の一手は、オリジナルキャラクターの着ぐるみだった。僕は興味も関心も無かったが、中に入っているのは同年代の女の子らしくて……。mixiにも載せております。

「しかし、どうなんだろうね？」

「何が？」

「ゆるキヤラブームってやつ」

「ん？ああ、アレのことか…どうでもいいんじゃない？宣伝になるなら良いだろ」

「いやいや、ブームに乗る根性のことを言ってるの、俺は」

「それでも、何もやらないよかマシだろ。八軒堂、最近俺食ってねえもん」

「まあな。いや、老舗の癖にブームに乗る根性が嫌われてのことも」

「ん？いや、まあまあ人気有りそうじゃん？…アレ」

「…まあ、そりゃ子供にはな」

「いやいや、俺はアレ、結構悪くないと思うけど？」

「それで店に入る気になるか？」

「なるね」

「そりゃまた、奇特なことだ」

「お前も素直になれ。結構可愛いじゃねえか」

「どこがだよ？」

「黒髪とか、笑顔とか、和服とか、名前とかだよ！」

「…全部、着ぐるみだろ」

「ばっか、心の目で見るとだよ！！」

「そんなスキルは無い」

「はんつ、じゃあ俺はアレに敬意を表してドラ焼き買っていくかな」

「じゃあ俺は先に帰るわ」

「ちっ、冷めた奴だ。いつか“和菓子ちゃん”の魅力に気付いて後悔すると良い」

「しねえよ。じゃあな」

その数カ月後に僕は悪友に言われた通り、後悔はしないまでも、その魅力に気付く。

老舗和菓子屋『八軒堂』。その変わらぬ味。そして。

僕は悪友に言ってやろうと思うんだ。…お前こそ、彼女の魅力が分かってなかったよ、と。

――

高校からの帰り道。商店街の中ほどに、創業75年の老舗和菓子店がある。

店構えも立派なもので、古びた引き戸のガラスの奥に見えるのは、製作工程まで丸見えな見通しの良い店舗空間。奥の作業場は、蒸気で黒々と濡れた木製の木杵や柱が、汚らしいわけではもちろん無いけれど薄暗く見える。蒸した餡の香りがおやつ時ならずとも空腹を誘うが…いかんせん、日常に溶け込み過ぎているのが否めない。

どうしても、商店街の中でも手前のクレープ屋や奥のケーキ屋に客を取られてしまう。常連は多いが、若年層は少ない。

老舗なのは確かだが、つまりは、流行っていない老舗ということだ。

そしてそんな老舗は、この度その状況から脱却するための挽回の一手を打ってきた。それと言つのも…

「和菓子ちゃん!!」

わがしちゃん、と子供の呼び声が後ろから聞こえる。

振り向くまでも無く、風を巻いて駆け抜けていく子供が三人。

科学部の活動を終えた俺は、家路の途中だ。おそらく子供たちは小学校の後、学童保育に参加した帰りなのだろう。現在、夕方の五時半、の商店街。

駆け抜けていった小学生たちは、目標物に向かってミサイルのよ

うに突進し、ミサイルのように激突した。

「きゃっ」

くぐもった悲鳴が、小さく聞こえた。

そしてそのまま子供たちは激突した対象にまわり付く。

「ねえねえ和菓子ちゃん！もこもこーってして！」

「僕も僕も！！」

俺は通り過ぎながらその様子を眺める。

俺よりももう少し高いくらいの、横幅で言ったら倍以上、顔のサイズなら十倍はあるその着ぐるみを。着ぐるみにまわり付く子供たちを。

求められた“もこもこ”とやらもいつものことらしく、小学生をその分厚い両手で挟みこんで撫で練り回している。ぐにぐに顔を変形されながら、きゃいきゃい騒ぐ子供たち。

『和菓子ちゃん』

老舗八軒堂が起死回生の一手として打ち出してきた、オリジナルの着ぐるみ作成という異彩を放つ発想の具象。二・五頭身くらいで、とてとて、と歩く姿が可愛い。まん丸な顔はかなり大きく、なおかつその中ほどにあるくりつとした目も大きくて顔の半分近くを占める。エンジ色の和服に濃緑色の前掛け、足袋に下駄。髪はアツプにして、お団子で纏めている。お団子に指したかんざしは、そのまま串団子のような。そして、胸に大きく“和菓子”と書いた名札が。

たかが…と言ってしまつては悪いが、一店舗がキャラクターを作つて着ぐるみまで作るのはどうなのか。デザインは可愛いのだが立体になると不気味さもあり、子供には人気だが、大人からの評判は悪くは無いけれど良くも無い。俺が部活を終えて帰ってくる時間にはいつも外に出て客引きをしている。

そう、その時間には“いつも”だ。中に入っている人は従業員なのだろうか？同じ人間がやっているとは限らないけれど、よく頑張ると思う。商店街のアーケードで日差しは当たっていないにしろ、

これからもつと暑くなっていくのに。

そういえば、さつき子供に体当たりされたときに聞こえた悲鳴は、くぐもつていたけれど女性の声だった。

「ばいばい!!」

子供たちが“もこもこ”に満足して去っていくのを、和菓子ちゃん hands を振りながらずっと見送っていた。僕は、向かいの本屋で物色しながら、それを何度と無く見てきた。あくまで本屋に用があつてのことだが、なんとも日常に溶け込んだその光景。八軒堂らしいといえは、らしい気がする。

一店舗がオリジナルキャラクターの着ぐるみまで作るのは、自己主張激しいとか立場をわきまえるとか採算取れるのかとか、色々否定的にも考えてしまうが。それでも。

：子供好きな人が入っているのは、好感が持てる。

いつも和菓子ちゃんに目が行ってしまうのは、確かなのだった。

そして日は経ち、ある夏の日のこと。

七月の頭、テスト一週間前。いつものように部活で、実験と称して色んな飲み物でアイスを作って食い漁った帰り道。いつものように子供にまわり付かれる和菓子ちゃんを見付けた。

「ね〜ね〜和菓子ちゃん、それ暑くないの〜?」

暑くない、と手を振り主張する。

「でも絶対暑いよね〜」

大丈夫だと腕を上げる。

「ホントにだいじょうぶ?」

大丈夫、大丈夫。とばかりに跳ねてみせる。

夏の盛り。日差しは遮られているものの、気温は30度を超えているだろう。着ぐるみまで着て、暑くないわけが無い。

俺は遠くから進行方向にそれを見ながら、近づいていく。和菓子

ちゃんも実際返事をしているのかもしれないが、子供の声だけが商店街のざわめきの中、聞こえてくる。

「じゃあね！和菓子ちゃん！！」

「無理しないでね〜！」

子供たちが声を掛けながら去っていくのを、最後まで“大丈夫”をアピールして飛び跳ねながら手を振る。近くまで来た俺は、（無理してるって）などと思いつながら、通り過ぎようとする。

と、子供たちが振り向かなくなった瞬間、ぐったりする和菓子ちゃん。店内に戻ろうと向きを変えたとき、その大きな体が揺らぎ。

「危ない！！」

運よくすぐ近くに居た俺は、それを抱きとめる。

「…あ、ありがとう」

か細い声が聞こえる。

大きな体の割には予想していたほど重くなかったが、しかし触れた表面だけで既に、予想以上に暑かった。

「ただ、大丈夫ですか！？」

「うん、だいじょ…」

「いや、大丈夫な訳無いですって！子供たちにサービスして無理するから！」

「あはは、見てました？…ちょっと、ごめんなさい、立たせて…っしょ、っと」

声は力ないながらも意識ははっきりしているらしく、立つ姿も問題無さそうだ。だが。

「今日はもう、休んだほうが良いですよ。夏場なんだから休憩もしっかり取って」

「…そうね、そうする。ありがとうございます」

「あ、そうだ」

俺はバッグの中からペットボトルを取り出した。『実験』に使わなかったジュースだ。

アセロラ黒糖。俺は大好きで持っていたのだが、他の部員に飲

みもせず反対され、使うことが出来なかった。

「これ、飲んでください。開いてないんで、大丈夫ですから」

「いえ、そんな…」

「良いから。いつも見てますよ」

「…ありがとうございます」

今度は素直に受け取り、前掛けのポケットに入れる。

「また今度、お礼させてください」

「気にしないで。子供たちも言ってたけど、無理しないでください」

「…ありがとうございます。では、また」

と言つて、店内に戻っていく和菓子ちゃん。喋りながら少しは休めたのか、ふらつくことは無かった。

ふう、と微かな満足感を覚えながら、俺も家路に着く。

アセロラ黒糖も、買って帰ろう。

数日後。

「和菓子ちゃん、暑くないの？」

…

「そうだよ。着てなくても暑いもん！」

…

「じゃあ、私たちが扇いであげる!!」

…

「どう、涼しい？」

…

「良かった！また来るね!!」

…

手を振る和菓子ちゃん。

良かった、今日は元氣そうだ。無理はしていないらしい。

そんな姿を後ろから見て俺も安心してしていると、子供たちを見送った彼女が振り返り、俺を見付ける。

「!!」

なんだか慌てだした和菓子ちゃんに苦笑しながら、会釈をする。
と、バタバタしたまま手招きをされる。なんだろうと思いつながら近づいていくと、とてとて、と逆に俺から逃げるように店内に入っ
ていった。

「……？」

なんの手招きだったのか、このまま待っていて良いのかも分
らないで居ると、すぐに和菓子ちゃんが出てきた。

小さな袋を手にとって。

「こ、これ、このあいだのお礼です！」
と差し出す。

「いえ、そんなつもりでやったんじゃないですから」

まあ手招きされた時点で少しは予想していたが、そんなつもり
じゃなかったのは本音だ。

「でも、貰って欲しいんです！嬉しかったし！アセロラ黒糖、美味
しかったです」

「美味しかった！？」

「え、はい。甘いけど爽やかで、ちょうど良かったです。どこに売
ってるんですか？」

「いや、ちよつと行った個人営業のコンビニで売ってるんだけど、
美味しいよね。人に勧めても飲んでもらえなくてさあ」

なんだか急に親近感が湧いた。

「あ、だから気にせず貰って下さい。嬉しかった分、ですから」

「……ん、じゃあ分かりました。頂きます」

と、頭を下げながら受け取る。腕の位置が低いので、軽くしゃが
んで。

開くと、中には

「ドラ焼き？」

「はい、ウチの人気商品です。美味しいですよ？」

「へえ……」

袋の中には、某アニメでよく見る円形が。

ここは、礼儀として目の前で食べるべきだろうか。甘いのはそれほど得意じゃないのだが。

意を決して、食いつく。もぐもぐ。

「……………美味しい」

驚いた。甘くない。

「うふふ、あんまり甘くなくて、小豆の味がするでしょ?」

「うん、なんかチクチクしないって言うか」

「洋菓子とかの砂糖いっぱい使ってる甘さより食べやすいって評判なの。食べたこと無かったですか?」

「いや、あるけど最近親が買ってこないから…四年ぶりくらい、かな」

少なくとも、中学に入ってから食べた覚えが無い。

「良かった、喜んで貰えて!」

和菓子ちゃんが体を揺すって喜びを表現する。

「良かったら買いに来て下さいね?安いし、買い食いにも最適だから!」

「え?いくらなの?」

「90円!!他の餡入りのもあるよ」

「へえ、90円…!」

また驚いた。クレープやシュークリームより安く、量もあるし何より、俺にとつてとにかく好みの味だった。生地はふわふわ、中の餡子はほろりと口の中で崩れ、仄かに甘い。今回ののは程よく冷めていたが、焼きたてもきつと美味しいだろう。

「それはホントに、今度買いにくるわ。通うかも」

「えっ、ほんと?嬉しいな」

着ぐるみの中で、顔も知らぬ女性が嬉しそうに笑っている。なんだかこっちまで嬉しくなってくる。

「じゃあ、また来ます。ありがとうございました」

「いえいえ、こちらこそ。…ホントに来てね?サービスするから!」

「サービスなんて要らないよ。また食べたいから」

「えへへ…じゃあ、またね！」

「ええ、また」

手を振り、別れる。

なんとなくだが、中の人は同年代だろうなと感じた。

しばらく、テスト期間なこともあり、部活も無かった。ので、次に八軒堂に行ったのはテストが明けて夏休み間近な、七月の中頃。

「和菓子ちゃん」

「あ！この間はいつも」

バランスの悪い体で会釈をする。うつかりすると前に転げてしま
いそうだ。

「いや、もうお礼も貰ったし、お互い様ですよ」

「…はい、そうですね。じゃあ、いらつしやいませ？」

「うん、ちよつと今日は、中を見てみようかなって」

「わ、嬉しいです！ドラ焼きなら、栗餡もお勧めですよ」

「うん、見てみます」

がらり、と木製の引き戸を開ける。

「いらつしやいませ〜！！」

「…いらつしやい」

奥さんらしき人の明るい声と、ご主人らしき人の渋い声とが聞こ
えてくる。

と、奥さんが何かに気付いたように、

「あら、あなたが、もしかして？」

「？」

「えつと、ほら、和菓子ちゃんを助けてくれたでしょう？」

「え？」

と、店の外を眺めやると、和菓子ちゃんがわさわさと僕の方を示
して見せていた。

「ああ、はい。助けたってほどじゃないですけど」

「いいえ、助かりましたよ。“和菓子ちゃん”を作って初めての夏で、あの子も頑張る性格だから…私もあの人も、気付けなくて」
奥さんが、旦那さんをちらと見る。

「悪かったな、坊主」

「い、いえ！そんな…」

「ちゃんと休憩もさせるし、水分も取らせる。忠告してくれて、ありがとう」

深々と頭を下げられて、俺は慌てる。

「えっと、差し出がましい真似をしまして…お礼ももう貰いましたし、気にしないで下さい」

「…そうね。この前、ドラ焼き食べてもらったのよね？どうだった？」

「美味しかったです。ここの和菓子、食べたのかなり久しぶりだったんですが、凄いい好きでした。甘いのが苦手だったんですが」

「ああ、甘いのが苦手な人には好評よね。ウチの餡子は天然の甘味料しか使っていないから」

「なるほど、それで…」

納得する。老舗には、続いているだけの理由があるということか。

「あ、あんまり引き止めてもいけないわね。何にするの？」

「あ、はい。栗餡のドラ焼きを勧められたんですが」

見ると、ドラ焼きはシューケースの上、取り出しやすいように綺麗に木枠の中に並べられていた。餡子。栗餡に、芋餡。ウグイス餡。生クリーム入りなんてものもある。値段は多少違うが、どれも安い。
「そうね、安いから若い子達はドラ焼きを買っていくわね」

他にも綺麗な練り物や饅頭。水羊羹などは夏の商品なのだろう、大きく宣伝文句が書かれていた。

ふと、思ったことを言ってみる。

「中は涼しいんですね？」

「そうね。このお店は木製だから、もともと風通しは良いの。商店

街は屋根もあつて風が無いけど、お店は裏から入ってきてくれるから、外より涼しいでしょ」

「確かに…」

色とりどりで、しかし落ち着いた色合いで、店内の不思議な涼しさと相まってずっと眺めていたくなる。

とはいえ、長居してもいけない。

「えっと、じゃあ栗餡と、普通の餡子で」

「ドラ焼き二つかしら？」

「はい」

「じゃあ、200円ね」

「…はい、ちょうど」

百円硬貨を二枚、奥さんに渡す。

旦那さんが商品を詰めている。詰めていく。詰めて…あれ？

ドラ焼き二つに、饅頭二つに、金つばに、もう一個ドラ焼き。重くなった袋を、

「あいよ」

と渡してくる。

「え、いや、貰えませんよ」

「持つてけ。礼だよ」

「い、いえ、もう和菓子ちゃんから貰いましたから！」

「良いから」

旦那さんが言葉少なに押し付けようとしてくる。助けを求めて奥さんを見ると、

「うふふふ、この前のはあの子からのお礼。今回は私たちからのお礼だから」

「そ、そんな…」

「遠慮すんな、坊主。この分なら、多分売れ残るから…」

そんな言い方をされると、なんとも断りづらい。外を見ると、ずっと見ていたのか、和菓子ちゃんがうんうんと頷

いている。

最後に奥さんを見ると、

「貰って下さいな。また来てくれると嬉しいわ」

「……………はい、ありがとうございます」

受け取り、外に出る。むわっと熱気が襲いかかってくる。

「金つば、美味しいよ?」

中でにまにましているような声で、和菓子ちゃんが見送ってくれた。

その後、夏休みに入り部活の回数も減ったが、なんとは無しに“部活の後は八軒堂”というのが俺の中で決まりごとになっていた。

相変わらず暑そうな和菓子ちゃんにアセロラ黒糖を差し入れしてお返しを貰ったり。会話もした。子供が好きで、大変だけど懐いてくれるのが嬉しい、と。

水羊羹が、とても美味しかった。控えめな甘さと、喉越しの良さと、つるりとした舌触りとが心地よかった。見た目にも涼やかで、家族にも買って帰った。家族にも好評で、母親も「久々に食べたけど、美味しいわよね。あなた、甘いもの苦手だったけどこのは平気なの?じゃあお母さんもまた買いに行こうかしら」などと言っていた。その話を和菓子ちゃんにしたら、大層喜んでくれて、俺も嬉しくなった。

部活仲間と連れ立って行ったりもした。ドラ焼きが安いと評判になり、しばらくの間は仲間内でブームになった。

夏休みが終わっても、部活の後は毎度のように八軒堂に通い続けた。

「和菓子ちゃん!」

いつものように、子供たちの声が商店街に響く。

「和菓子ちゃん、あったかそう!良いなあ!!」

八軒堂に通うようになって半年近く。仲間内でのブームは終わっ

たが、俺の中ではブームを越えて習慣となっていた。

老舗とはかくあるべき、などとも思う。日常の中に溶け、ブームなどでは無く特別なときだけでもなく、いつ来ても同じ味で迎えてくれる。キャラクターを作ろうが着ぐるみで客寄せをしようが、そこは変わらないのだろう。

「もこもこ」ってして!!」

季節は冬の始まり、十二月の頭。商店街も風が無くても寒いし、確かに和菓子ちゃんは暖かそうだ。

そんな様子を見ながら、軽く会釈をして店の中へ。

夏の店内が涼しいならば、冬は…と思っていたのだが、実はビツクリするほど中は暖かった。冬場は暖かい商品をお客さんに出すために、常に蒸し器で饅頭を、定期的にドラ焼きなども作り直しているからだ。

去年までは気にもしなかったが、気付いてみれば冬の商店街は、かなり遠くからでも分かる蒸した餡子の香りが漂っていた。

「おじさん、おばさん」

「いらっしやい」

「いらっしやい、今作ってるのは芋餡だよ」

もう慣れたものだ。30分に一度生地を焼き、そこに毎度違う餡子を入れていくから、その時々で出来立ての商品が違ってくる。今回は、蒸したサツマイモを混ぜ込んだ餡子の、芋餡ドラ焼き。

「じゃあそれ、二つ」

「はい、じゃあ220円ね」

「はい」

「ちよっと待つてな、出来たやつ包んでやるから」

「ん、ありがと」

「外、寒いでしょう?」

「うん、かなり寒いよ」

「中で食べて行っても良いわよ?」

「いや、寒い中で食べるのが良いんだよ」

「そう？いつもあの子と喋るために、付き合いで外に居るんじゃないかと思って…」

「そんなじゃないって…ありがと」

誤魔化しながら商品を受け取って外に出ると、子供たちを見送った後の和菓子ちゃんがこちらを見ていた。

「やつほ」

「ん、やつほ」

「今日は何？」

「芋餡」

俺は袋からドラ焼きを取り出して、一口かじる。

「美味しい？」

「うん、美味い。熱い。美味い」

「そ、良かった」

奥さんには否定したが、僕がいつもドラ焼きを二つ買って一つを和菓子ちゃんと喋りながら食べるのは、確かに彼女に合わせたのとだ。着ぐるみは暖かそうだが、それでも外に長時間居れば冷えるはず。

客引きで動き回っていても、子供たちと遊んでいても、人通りの少なくなってくるこの時間帯には、なんと和菓子ちゃんが寂しそうに見えてくる。だから。

「和菓子ちゃん、寒くない？」

「うん、さつき子供たちと遊んだからね」

「そ、良かった」

いつも似たようなやり取りだが、これで良い。

いつだったかに、買ったドラ焼きを分けてあげようとしたこともあったが、断られた。買ってもらった商品を貰ってたらお父さんに怒られちゃう、と。

娘、らしい。店員なのかとも思っていたが。

三女だけれど、姉妹の中では一番店を手伝っているんだとか。

「芋が良いよね、芋が。ほくほくして」

「うん、冬は芋よね」

「じゃあ春は？」

「春…うん、秋は栗餡で夏はウグイス餡な気がするけど、春ねえ。クリーム入りも売れてるけど、ホントは入れたくないとか言ってたし」

「そうなの？」

「うん、洋風なもの入れたくないんだって。じゃあ春は…桜餡とか？」

「良いかも」

「あ、でもドラ焼きだと隠れちゃう」

「隠れたら駄目なの？」

「季節ものは見た目が大事なの」

「じゃあ、桜の花びらを上に乗せるとか」

「うん、それなら良いかも。今度言ってみようかな」

そんなことを喋りながら、一つ目のドラ焼きを食べきる。もう一つは帰り道のお供だ。

「それじゃ、そろそろ行くね」

「うん、いつもありがとうございます。また来てね」

「もちろん。しかし寒いな…あ、そうだ」

「え？」

これから歩く寒い道のりを思っ若干嫌になったところで、思いついた。

「俺にも、“もこもこ”ってやつ、してよ」

「子供たちにしてるやつ？」

「うん、アレあったかそうだから」

言いながら、顔を差し出す。

「良いけど…もこもこもおっつ」

顔をぐにぐにと揉まれる。

これは…

すべすべとした感触。子供たちの熱がわずかに残り、摩るほどに

増していく温もり。顔を揉まれる心地よさ。子供の頃に力強く頭を撫でられた時にも似た、身を任せる感覚。顔に血が巡っていく。

これは…気持ち良い…！

「もかもくくく…と。これくらいで良い？」

「これは、やばいな。ホントに」

「え、そんなに？」

「好きだわ」

「え！？」

「今度来たときもして欲しいかも。すっごく好き」

「ふえ！う、うん、そう？そうだねっ」

「じゃあ、またね」

「ま、またね…」

そして俺は、もう一つのドラ焼きを食べながら帰る。

ほっこりした頬に、幸せな気分で。

最後の和菓子ちゃん、少し変だったかな、と首を傾げながら。

それからしばらく。

週に二三度、部活の後の八軒堂通いは変わらなかった。

が、変わったものも、ある。

「おじさん、おばさん」

「いらっしやい」

「いらっしやいませ。今は…普通の餡子ね」

「じゃあ、それ二つ」

「はい、ちよつと待ってね」

「…おばさん、和菓子ちゃんどうしたの？なんかここしばらく、隠れるんだけど」

「あはは、そうね。隠れるわねえ」

ここしばらく。最初は何か用事があるのかと、その次は客寄せの

為かと。そして三度目に気付き、四度目に確信した。

…避けられている。今日も俺を見つけて、とてとて、と逃げていた。

奥さんは笑うが、こちらとしては笑い事じゃない。

「俺、嫌われたかな…？」

「え…？嫌われたわけじゃ、ない、と思うわよ」

ない、のところで外を見る。和菓子ちゃんが店の外から覗きこんでいる。

「そうですかねえ？」

「じゃあ、そうねえ…今度、休みの午前中にお店に来てみなさい」

「休みの…午前中？」

「来れば分かるから、ね」

「はあ、分かりました」

その時に来たら、何があるというのか。

店を出たら、和菓子ちゃんは既に遠くの電柱の影に隠れていた。

…隠れきれいでいなかったけれど。

俺はそのまま視線を感じながら、ドラ焼きをかじりつつ、帰っていった。

数日後。日曜日の午前中。

俺はおばさんの言うとおり、店に向かっていた。

何が待っているのか…予想はつく。予想はつくが、まさかとも思
う。

まさか。

店の前にたどり着く。いつもと同じ、甘すぎない餡子の匂い。

木製の引き戸を開ければ、そこには予想外の…ある意味、予想通りの光景が。

「いらつしゃ…」

目が合った女性は、目が大きく幼い顔立ちで、おそらく同年代だろう。お団子ヘアが、なんとも可愛らしい。

「…っきゃーっ!!」

「うわっ」

悲鳴をあげられ、俺もびくつとする。

「ななな、なんで!なんで!」

叫びながら、女性はレジ裏の壁に隠れる。

「なんで、だつていつつもは平日の夕方に…お、お母さん!」

助けを求めるように、かつ、何かに気付いて責めるような視線を奥の作業場に向ける。

おばさんはくすくすと笑いながら、おじさんは苦々しげな表情をしながらも、女性の言葉を見無視して和菓子作りに専念している。

見れば、女性はどこかで見たような格好をしていた。エンジ色の和服に濃緑色の前掛け、そして何より、胸元に名札が。

『和菓子』

「わがし…いや、わかこ、さん?」

見慣れた文字列から、草冠の抜けたその名前。

呼ばれ、恐る恐るこちらを振り向く。目が合い、さらに身を隠す。

その壁に隠れる姿すらも、見覚えがある。

「……なるほど、本名と掛かっているんだね。和菓子ちゃん」

「は、はい…」

彼女が、ゆつくりと俺の前に出てくる。恥ずかしげに。とてとてと。

やっぱり。それ以外無いとは思っていた。きっと休みの午前中は、両親は和菓子作りで彼女が店頭に立つことになっているのだろっ。

それでも半信半疑だったし、何を話すかは考えていなかった。

「えーっと、じゃあ」

「はい…」

「とりあえず、その…」

「はい…」

「と…友達に、なつて、もらえますか?」

「…と、もだち、ですか?」

なんだか納得いかないような顔をされているが、だって向こうは違うかもしれないが俺にとっては初顔合わせだ。ここから、改めて始めないと。

「は、はい。友達ですか。良いですよ、おともだち…」

奥ではおばさんが笑いを堪えているし、おじさんがむすっとしている。

友達になれたなら、次の休みはどこかに遊びに行こうか。

…折りしも、次の休みといえばクリスマスだけれど、他意は無い。そういえば、和菓子屋でもクリスマスは祝うのだろうか？

ケーキでは無く、和菓子で、きつと。

仄かに甘い、特別な日を…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6385z/>

灰かに甘い

2011年12月21日14時52分発行